

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和57年度

昭和58年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和57年度

序 文

奈良市教育委員会が、平城京での主体的な発掘調査を開始して四年目になりますが、現在では殆んど切れ目なく発掘している状態になってきております。周知の遺跡での発掘届出件数も昭和54年度には123件であったのが、今年度は261件とちょうど倍増しています。発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県、大和郡山市、奈良市の四者が協議して実施しておりますが、件数の急増のためその対策に苦慮しているのが実情です。

昭和57年度の調査のうちまとまった成果を得た東市跡と水道局庁舎建設予定地の調査報告については別冊として刊行し、その他のものをここに一括して報告いたしました。したがって集録した報告は比較的小規模なものが多くなっておりますが、左京五条五坊五坪のように平城京造営以前の建物跡が確認できた例もあり、一定の成果を得ております。今後とも調査体制の充実をはかってまいる所存であります。

発掘調査にあたって、日頃御指導、御協力をいただいております奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめ関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 58 年 3 月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

例 言

1. 本書は、昭和 57 年度に奈良市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。

なお、昭和57年度には、本書に収録した調査以外にも、平城京左京八条三坊十一坪（東市跡推定地）および平城京左京二条二坊十二坪において発掘調査を行なっているが、両調査については別途に概報を刊行する予定である。

1. 本書に集録した報告は、次頁の目次に記したとおりである。なお調査地の位置は、折り込みの発掘調査地位置図に示している。
1. 本書の執筆は、調査担当者が分担して行ない、各報告の末尾にその文責を明らかにした。全体のとりまとめについては、中井 公がこれにあたった。

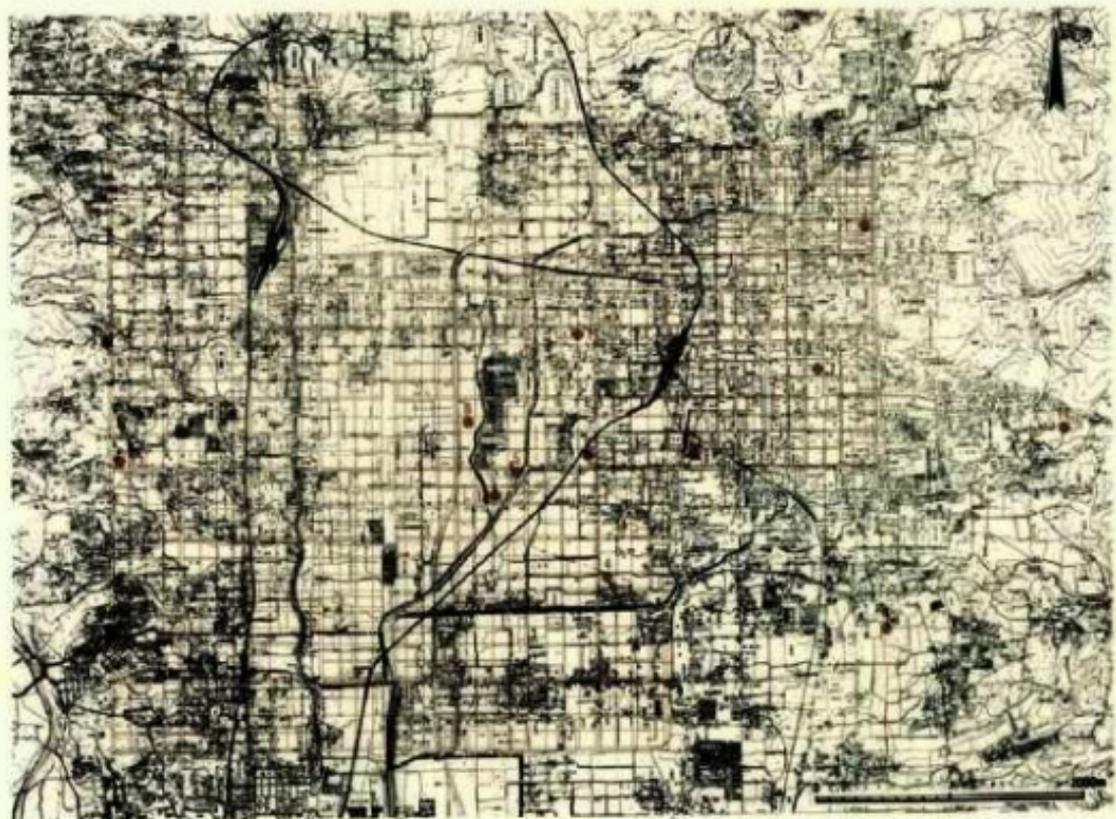
目 次

1. 平城京左京四条三坊九・十六坪の調査	1
2. 平城京右京四条四坊十六坪（西四坊大路）の調査	2
3. 平城京左京二条七坊十四坪の調査	4
4. 平城京左京七条四坊三坪の調査	6
5. 平城京左京六条二坊十六坪（五条大路）の調査	7
6. 古市町内遺物散布地の調査	7
7. 元興寺食堂跡推定地の調査	8
8. 平城京左京五条二坊二坪の調査	12
9. 平城京左京五条三坊十三坪の調査	14
10. 平城京左京五条五坊五坪の調査	16
11. 高畑町内遺物散布地の調査	18
12. 平城京左京六条二坊十坪（東二坊坊間路）の調査	20
13. 平城京右京五条四坊十三坪の調査	20
14. 史跡大安寺旧境内の調査	21
82-1次調査	22
82-2次調査	22
82-3次調査	22
82-4次調査	23
82-5次調査	24
82-6次調査	24

調 査 地 一 覧

	調 査 地	調 査 期 間	調 査 積 算 面 積	
1	平城京左京四條三坊九・ 十六坪	三条添川町131番地の1	57年3月8日～3月18日	100㎡
2	平城京右京四條四坊十六坪	宝来町271～276番地他	57年6月15日～7月28日	919㎡
3	平城京左京二條七坊十四坪	押上町41番地	57年7月16日～8月3日	146㎡
4	平城京左京七條四坊三坪	東九條町谷1175番地の2他	57年6月1日～6月9日	42㎡
5	平城京左京六條二坊十六坪	大安寺西1丁目281番地	57年8月23日～9月8日	275㎡
6	古市町内遺物散布地	古市町1263番地	57年8月21日～8月27日	140㎡
7	元興寺食堂跡推定地	北室町18～22番地他	57年12月6日～1月31日 58年	260㎡
8	平城京左京五條二坊二坪	大安寺町出袋531番地の3他	57年12月20日～1月17日 58年	450㎡
9	平城京左京五條三坊十三坪	大安寺町142番地の1	58年1月19日～2月10日	210㎡
10	平城京左京五條五坊五坪	西木辻町67番地	58年2月1日～3月3日	438㎡
11	高畑町内遺物散布地	高畑町1476番地他	58年3月10日～3月31日	1020㎡
12	平城京左京六條二坊十坪	大安寺西2丁目208番地	57年12月20日～12月25日	64㎡
13	平城京右京五條四坊十三坪	五條町西山995番地の1	58年2月21日～2月24日	85㎡
14	史跡大安寺旧境内 (82-1次)	大安寺町東護麻堂1161番地の4	57年6月7日～6月12日	19㎡
	同 (82-2次)	大安寺町ヒラキ1161番地の1	57年10月1日～10月6日	18㎡
	同 (82-3次)	大安寺町1125番地	58年2月14日	4㎡
	同 (82-4次)	大安寺町1147番地	58年2月15日～2月16日	9㎡
	同 (82-5次)	東九條町1412番地の1	58年3月8日～3月10日	45㎡
	同 (82-6次)	大安寺町ヒラキ1265番地の4	58年3月16日～8月23日	40㎡
	平城京左京八條三坊十一坪	東九條町441番地の1	57年4月20日～8月7日	240㎡
	平城京左京八條三坊十一坪	東九條町493番地の1他	57年5月19日～6月24日	125㎡
	平城京左京二條二坊十二坪	法華寺町261番地の1他	57年5月1日～12月18日	1800㎡

※ 掲載番号は、発掘調査地位位置図に対応する。



北京城市图

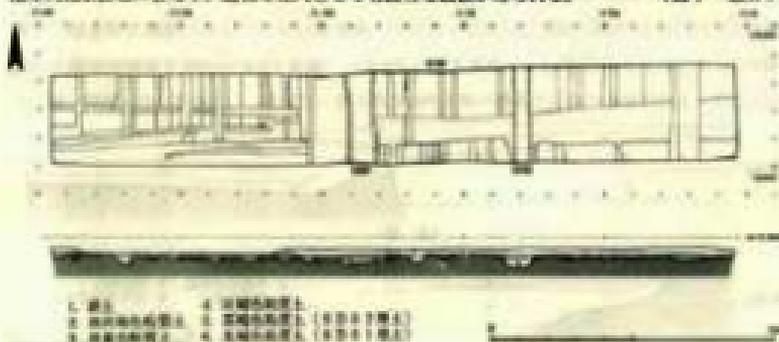
1. 平城京左京西条三坊九・十六坪の調査

本調査は、西暦70年頃の日本書紀の1において行った。遺跡調査としてもかなり早期調査である。調査地は平城京の東大路を調査するに必要地帯の東部で、平城京の東部では左京西条三坊九坪と十六坪の坪地に相当し、小堀の存在が推定される位置である。このため、調査は小堀の調査を目的として東西2坊、南北4坪の発掘区（面積約60坪）を設定した。調査は昭和27年3月5日から同日にかけて実施した。



発掘区の設定 1/200

発掘区の土層は、粘土、砂土の下、奈良朝前期粘土が全面に広がり、その下、灰褐色粘質土および淡黄色粘質土上面において遺構を露出した。露出した遺構は、木造の扉やのぞくものと思われる遺構や溝がほとんどであるが、南北に走る溝SD1、SD2からは、奈良時代の瓦、土器が出土しており、小堀の東西両側溝と考えられる。SD1は幅約40cm、深さ約25cm、SD2は幅約60cm、深さ35cmで、溝心同間の距離は5.7mを測る。両溝の間は小堀幅面約33mと推定でき九坪と十六坪との坪地小堀と考えられる。なお今少し詳細な設計を加えるならば、この小堀心は、平城京東御門のより西土方面位を介して南へ約60.47mの位置にある。南北方向の距離、ここでは、東大路が国土方面に対して北で15°44'西傾することとを考慮し、修正を加えると、両者の心々距離は約55.9mとなる。平城京東御門心から正北西条三坊九坪と十六坪との坪地小堀心までの遺跡計画距離は、490.0尺（3坊幅+3坪幅）であり、基準尺は0.246mとなり、遺跡単位尺としても適当な数値が得られる。（森下 直介）

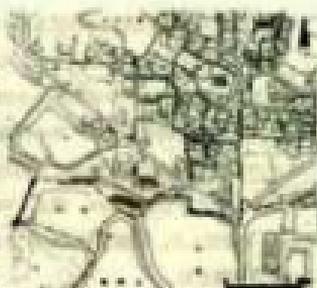


- | | |
|------------|--------------------|
| 1. 溝1 | 4. 淡黄色粘質土 |
| 2. 溝2 | 5. 灰褐色粘質土（厚さ約7cm） |
| 3. 東大路の粘質土 | 6. 東大路の粘質土（厚さ約7cm） |

発掘区遺跡平面図・北東方位土層図 1/200

2. 平城京右京西条西坊十六坪（西四坊大路）の調査

本調査は、奈良市東河原町1〜2号番地および平城京7坊、7aの遺地において実施した、京都市立平立区立南小学校建設予定地の造成工事に伴う事前調査である。調査地は、奈良盆地西岸の丘陵地であるが、平城京の東部遺跡では右京西条西坊十六坪の西辺にあたり、調査地東端には西四坊大路が想定された。加えて、造成予定地が丘陵地であるために、このほかにも遺構の有無の確認が必要であると判断された。ただ、調査地の大部分が丘陵地を内包した遺跡で占められていたために、トレンチを設定し掘らねばならぬ空閑地が限られた。調査は昭和47年6月15日に開始し、7月20日までの全日程を終えたが、この間に4箇所のトレンチを設け96㎡の範囲を調査した。



調査地の位置（1/200）

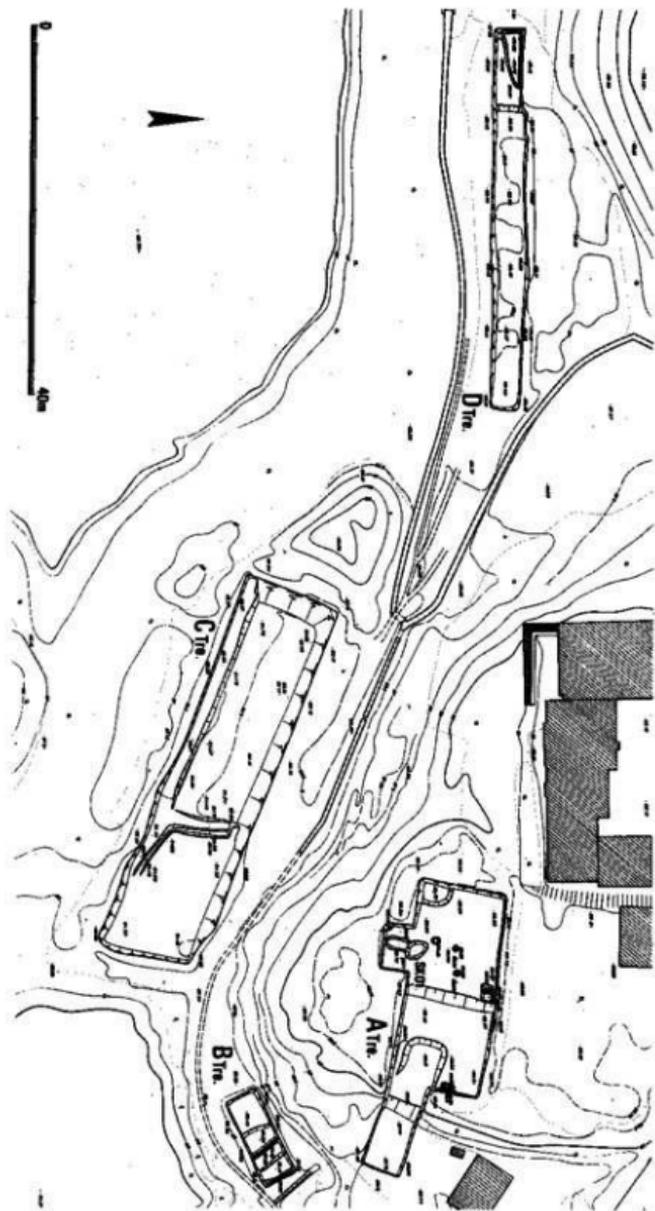
調査の結果、いずれのトレンチにおいても顕著な遺構は検出できず、西四坊大路についても何らその手摺りを見ることが出来なかった。以下、各トレンチについて概略を記しておく。

1トレンチは、調査地北端で北西から南東にのびる形状の小変形上に設定した。面積206㎡、南北11.0mの長さがあり、これを掘削すると黄褐色砂質土の地山が現われるが、南壁近くで長さ2.0m、幅1.0mの平直部状の土層を露出した。黄褐色の粘質土が堆積し、おそよ奈良時代の土層と土山の中間が出土した。5〜8の各トレンチは、4トレンチを設定した小変形の南縁部に配した。3トレンチは、東西10m、南北4.0m（約4㎡）、地表面下2.0mで黄褐色土の地山となるが、掘削り遺跡があられたにすぎない。7トレンチは、東西20m、南北10m（40㎡）、地表面下1.3〜1.6mで黄褐色砂質土の地山となるが、西半部は埋定てられた溝跡で灰色粘土が堆積する。9トレンチは東西10m、南北4.0m（約4㎡）、地表面下5.0〜6.0mで黄褐色砂質土の地山となり、土層は地形に応じて西側へゆるやかに高くなっている。（中略）（図説 巻一）



3トレンチ北壁・西壁地層土層図（1/200）

調査トレンチ配置図



3. 平城京左京二条七坊十四坪の調査

Ⅰ はじめに

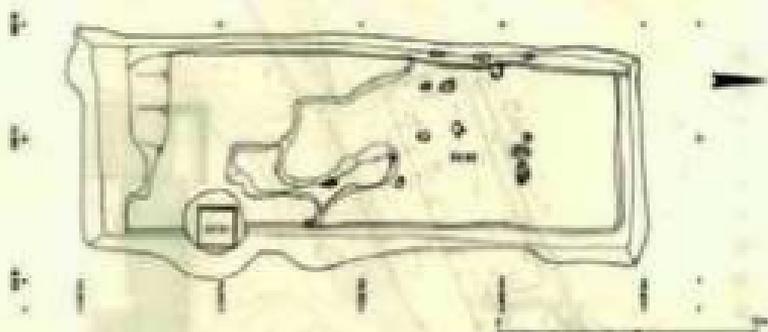
本調査は、奈良の平上町はるき地区において実施した、第七次歴史館建設工事に伴う事前調査である。調査地は、平城京の発見調査では左京二条七坊十四坪のはずれ中央部に当たる。調査は、東西15m、南北12.5m（140㎡）の発掘区を設定して行ない、調査の期間は、昭和37年7月20日から8月31日までである。

Ⅱ 発掘遺構

調査地は掘削された後、埋戻り0.8～1.2mまではその元の成土である。以下、黄褐色砂質土、暗褐色の礫砂などが0.5～0.8mの厚さで覆われ、地山の赤褐色礫砂になっている。掘出した主な遺構は、井戸1基、土壇1である。



発掘地の位置 1/700



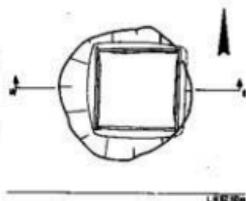
発掘遺構平面図 1/200



- | | |
|------------|-----------------|
| 1. 赤土上(礫) | 6. 瓦葺の土壇 |
| 2. 赤土(礫質土) | 7. 埋戻り成土 |
| 3. 黄褐色砂質土 | 8. 埋戻り成土(土まき土壇) |
| 4. 赤土(礫質土) | 9. 埋戻り成土(礫) |
| 5. 埋戻り成土 | |

西壁掘削土層図 1/100

S E01 発掘区の東南隅で検出。径約2.2mの円形掘形をもち、検出面からの深さ2.3mを測る。掘形の中央やや北東寄りに、内法1.34mの井籠組の井戸枠が据えられており、四段分が遺存していた。枠材は、両端を凹形に削ったものと、凸形に造り出したものとで組合わせの仕口としている。寸法は、幅14cm、長さ1.4mで、厚さ3cm内外を測る。枠内からは13世紀後半の土師器皿が出土した。

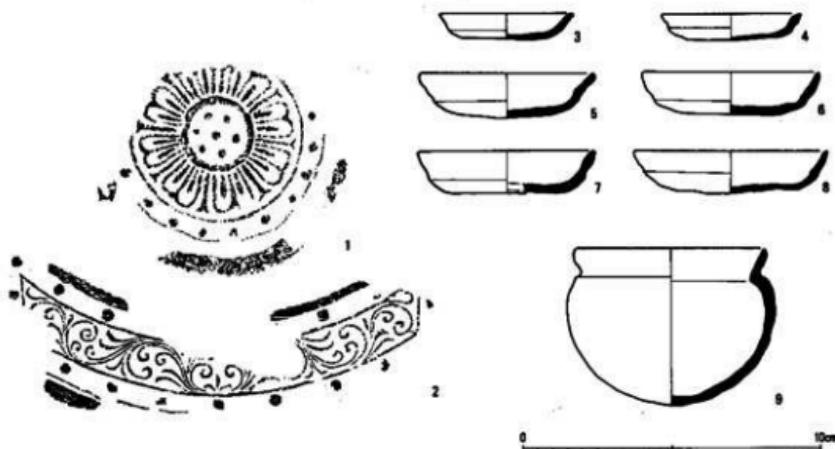


S K02 発掘区の北半で、南側へ緩やかに下降する落ち込みを確認したが、発掘区外北側へ広がる土壌の一部となる可能性がある。埋土は淡青灰色の砂礫で、人頭大前後の自然石が多く含まれる。黒色土器片、須恵器片とともに奈良時代の瓦が多量に出土した。



Ⅲ 出土遺物

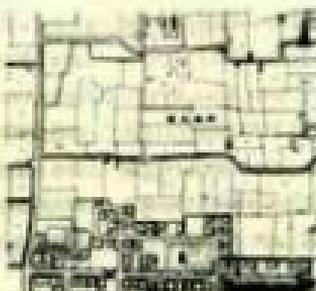
1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。太めの圈線で画された中房には1 + SE01平面・立面図 1/100の蓮子を配し、外区には珠文を巡らす。平城宮6235型式に属す。2は均整唐草文軒平瓦。対葉形の宝相華を中心飾りとし、その左右それぞれに3回反転する唐草文を飾る。外区には大振りな珠文を配す。平城宮6732-H型式と同范である。1・2はいわゆる「東大寺式」と称される軒瓦で、ともにS K02から出土した。3～8はS E01出土の土師器皿。大きさによって、小皿(3・4)と大皿(5～8)とに区別できる。いずれも外傾する口縁部と平坦な底部とからなり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面ともによこなでを施す。13世紀の後半に位置付けられよう。9は包含層出土の土師器甕。球形の体部と短い口縁部とからなる。(篠原 豊一)



S X02出土軒瓦, S E01・包含層出土土器 1/4

4. 平城京左京七条四坊三坪の調査

本調査は、奈良の第九法興寺行方遺地の調査において行った、宅跡調査にともなう副産調査である。調査地は、大宮寺の境内の南に接した木田で、平城京の東部では、左京七条四坊三坪の北辺にあたり、遺存地から七条東側御所南御道の行方が見えられた。調査はこの七条東側御所の南御道の確認に由来すると、南北30m・東西30m（面積約900㎡）の範囲でを設定した。調査は昭和37年8月1日から翌年にかけて実施した。

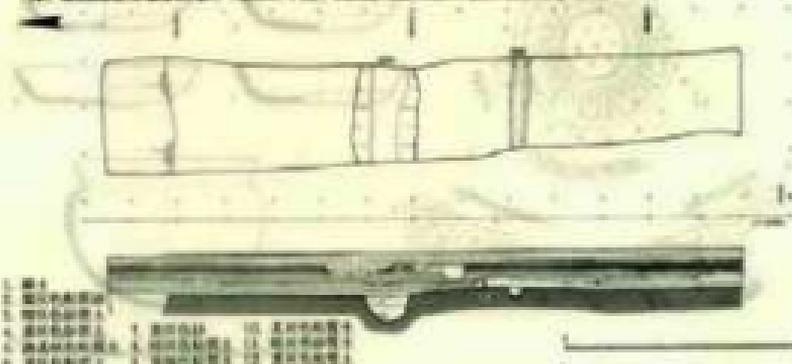


遺跡の位置 1/1000

一層以上の土層は、耕土、赤土の下に、暗灰色土、黄褐色粘質土、浅灰色土、黄灰色土、黄灰色土が埋積し、その下の黄褐色粘質土上面において遺構を形成した。

一層以上の遺構は30m以上の幅の遺構である。その幅は、幅約12m・厚さ約30cmの遺構を遺で、溝内より、奈良時代の瓦・土器が若干出土し、七条東側御所御道である可能性が考えられる。また、幅約10m・厚さ約30cmの遺構を遺で溝内からの出土遺物はなく、七条東側御所については、右京七条二坊においてその北側遺土層が検出されているが、西側は確認されておらず遺構については明らかでない。今、既に七条東側御所の幅員を3丈程度と想定するならば、その位置関係から、七条東側御所も他の東西並列と同じく西で溝に覆われているものと推測することができる。しかしながら、それ以上の幅約12m前後程度の遺構もまた見られる（後述）。

(注) 遺跡の位置は、昭和37年8月1日から翌年にかけて実施した。



- 1. 遺跡
- 2. 遺跡の北側
- 3. 遺跡の南側
- 4. 遺跡の東側
- 5. 遺跡の西側
- 6. 遺跡の北側
- 7. 遺跡の南側
- 8. 遺跡の東側
- 9. 遺跡の西側
- 10. 遺跡の北側
- 11. 遺跡の南側
- 12. 遺跡の東側
- 13. 遺跡の西側

遺跡の位置 1/1000

5. 平城京左京六条二坊十六坪（五条大路）の調査

本調査は、奈良市大宮寺西丁日野町墓地において実施した。宅地造成工事に伴う学術調査である。調査地は、東側に土佐川、西側に土佐川の支流である河川にほさまれた低地の河原地で、平城京の宅地調査では左京六条二坊十六坪の土手にあたり、北端には五条大路の南端の存在が予想された。調査は、造成工事が先行した場所で発掘区の設定が制限を受けたが、五条大路の想定される位置に東西10m・南北20m（200㎡）のトレンチを掘ることができた。調査の経緯は、昭和47年8月23日から同年9月3日までである。調査の結果、河原低地上の地山上面で近世の遺物と見ると特徴不明の自然遺跡らしきものを検出したが、平城京に属する遺物は検出できなかった。遺跡は北から南西に方向をとり、幅2.7~3.0m、深さ2.0~3.0mである。溝内には灰色の粘土が堆積し、溝底近くでは褐色の小片が含まれる。灰層が遺物の層に近づくに従って一定遺物であろう。（中略）



発掘区の様相（1/700）

6. 古市町内遺物散布地の調査

本調査は、奈良市古市町120番地において実施した。奈良市文化財調査センター他の建設に伴う学術調査である。調査地の周辺は、奈良時代遺物散布地として知られており、土器断片が奈良県教育委員会による分布調査の際、採取されている。今回の調査地そのものは、分布調査によって明らかになっている遺物散布地の範囲にあらずからかからずその中心部ではない。発掘区は南北25m、東西5m（面積125㎡）で、調査は昭和47年9月24日から翌日まで行った。



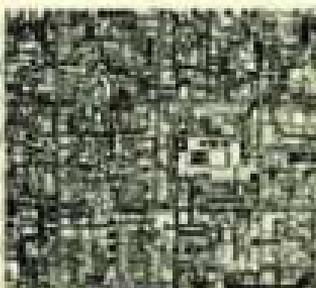
発掘区の様相（1/700）

調査の結果、地上、土上の下で、15cm程度の厚さで黄物が質土層が堆積しているだけで、その下には、黄物の砂質土層と砂層が広がっており、さらに1m程度掘り下げたが、砂層がシブき、何ら遺物は検出できなかった。遺物は、黄砂断片、瓦片が、近世陶器とともに黄物が質土層よりわずかに出土したにすぎない。出土した遺物については、野査しており、東方の遺物散布地より採集されたものと考えられる。（中略）

7. 元興寺食堂跡推定地の調査

1. はじめに

本調査は、本誌が計画した墓中群西遷跡跡地考古学調査の種別に関する調査である。調査地は、奈良県北宮町18～21番地跡で、元興寺食堂跡推定地の西遷跡および西遷にあたる。調査は、調査地の概略予定地内にA・B・Cと異なるトレンチを入れ、加えてDトレンチに北隣してEトレンチを設けた。調査の期間は昭和47年12月5日から昭和48年1月31日までで、土調査面積は300㎡である。



2. 調査経緯

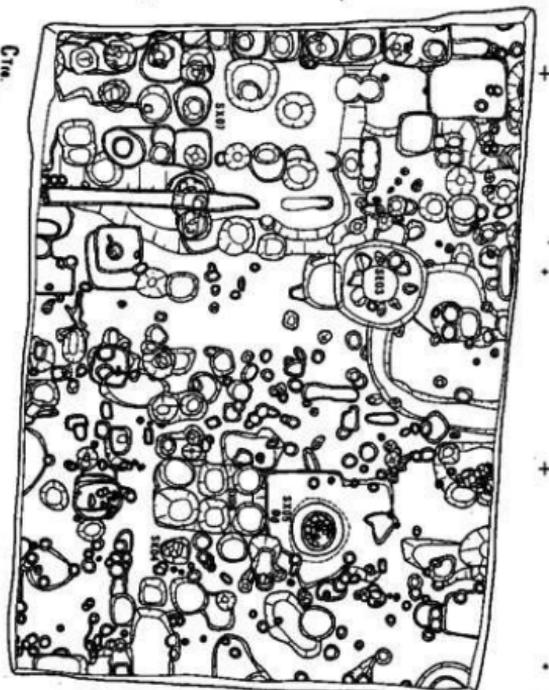
発掘地の位置 1/700

発出した主な遺物は、中世から近世にかけての土器、井戸、土穴群が大平らなため、奈良時代のもので、わざわざDトレンチで検出した遺物の群があるにすぎない。井戸S300は、Aトレンチ西側壁で検出した直径約1.5mを測る。井戸内からは14世紀後半の土器群が出土した。井戸S300は、Cトレンチで検出した直径約0.9mの円形石製井戸で、深さ約1.8mを測る。掘削のものである。土層S304は、Cトレンチ西側で検出した一辺約0.6mの方形土層で、深さ25cm以内と浅い。掘内には50cm程度の厚塊が遺存していた。S304北側で検出したS305は、一辺約3m、深さ約50cmほどの方形の浅い掘り込みの中身だ。さらに二段に掘った井戸状の土層をもつ遺構。上段は最大径1.3mの空室に、下段は径1mの円筒状に掘られ、深さ約1.5mを測る。近所には掘削機片、平瓦片が散らつてゐる。内側からは、14世紀末から17世紀にかけての土層層が遺存などともに、ふいでの開口、表層が出土しており、S304などと同時に築造関係の遺構とみることが出来る。S306・Dは、ともに埋蔵施設である。S306は、南北2.7m、東西1.8mの方形掘削内に2月の躯体部分の遺存を埋蔵するための穴が掘られているが、壁は遺存していなかった。



- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 掘削機片 | 2. 掘削機片 | 3. 掘削機片 | 4. 掘削機片 | 5. 掘削機片 |
| 6. 掘削機片 | 7. 掘削機片 | 8. 掘削機片 | 9. 掘削機片 | 10. 掘削機片 |
| 11. 掘削機片 | 12. 掘削機片 | 13. 掘削機片 | 14. 掘削機片 | 15. 掘削機片 |
| 16. 掘削機片 | 17. 掘削機片 | 18. 掘削機片 | 19. 掘削機片 | 20. 掘削機片 |
| 21. 掘削機片 | 22. 掘削機片 | 23. 掘削機片 | 24. 掘削機片 | 25. 掘削機片 |
| 26. 掘削機片 | 27. 掘削機片 | 28. 掘削機片 | 29. 掘削機片 | 30. 掘削機片 |
| 31. 掘削機片 | 32. 掘削機片 | 33. 掘削機片 | 34. 掘削機片 | 35. 掘削機片 |

Cトレンチ西側壁掘削土層図 1/300



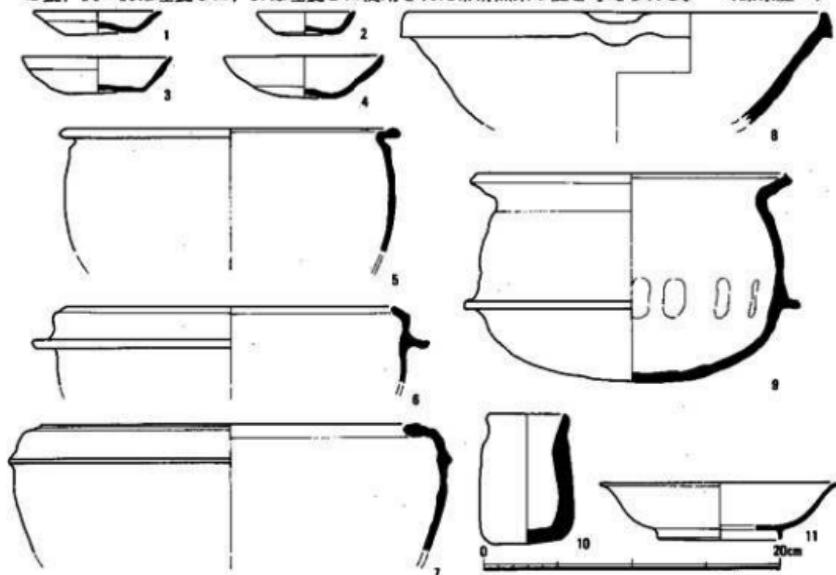
檢出遺構平面圖 1/150

S X 07は、東西9 m以上、南北18m以上の大規模な掘形内に、東西6列以上で南北14列以上の甕を埋置していたものと考えられる。中で35箇所の埋置穴を確認したが、うち15箇所には甕が遺存していた。埋置穴には重複関係がみられ、数回にわたる造り替えのなされたことがわかる。遺存していた甕は、常滑窯系あるいは備前窯系のもので、14世紀から15世紀にかけてのものである。甕内および埋置穴には焼土がみられたことから、火災によってこの遺構が焼絶したことがうかがえる。

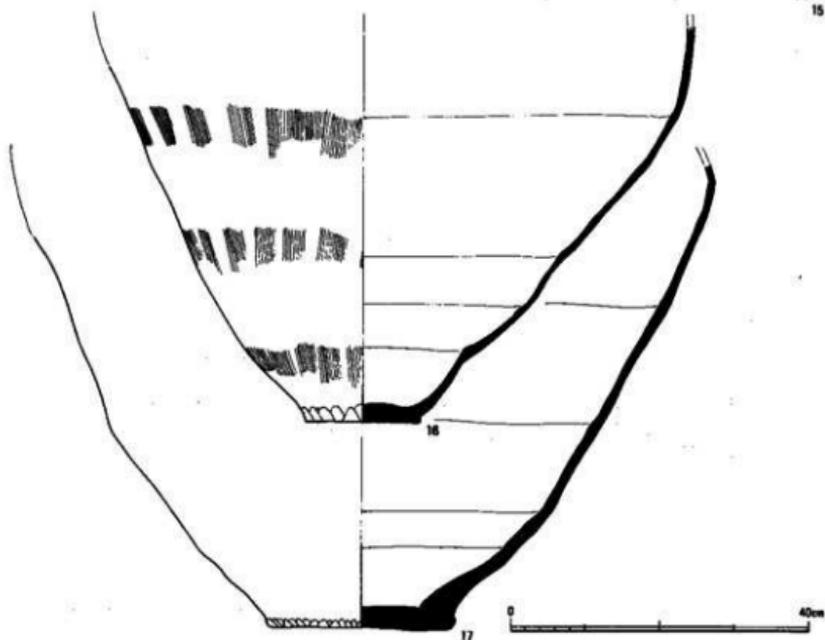
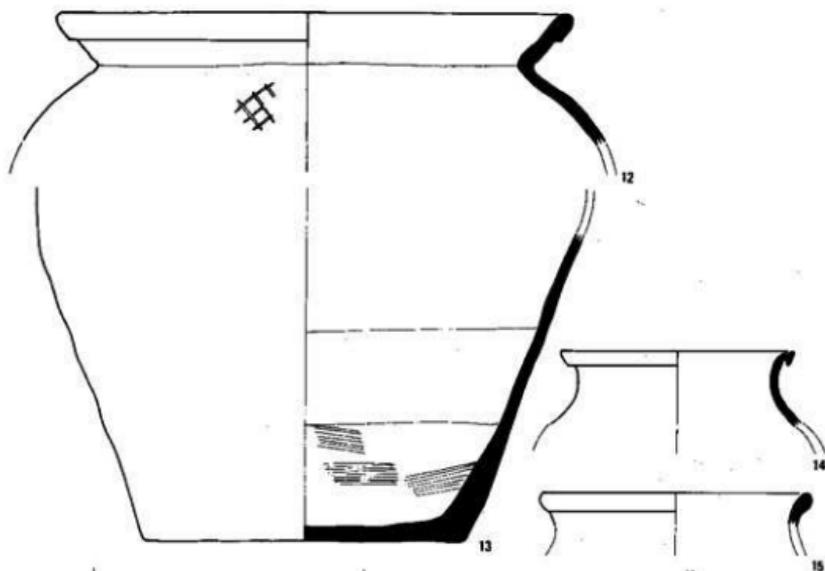
以上のように、今回の調査では、元興寺食堂に直接懸わると思われる遺構は検出することができなかった。しかしながら、中世・近世の奈良町の様相をうかがい知る上では、少なからぬ成果を上げることが出来たといえよう。

Ⅲ 出土遺物

出土遺物には、土師器皿（1～4）、土師器羽釜（5～7・9）、土師器壺（10）、須恵器鉢（8）、陶器甕（12～17）白磁皿（11）などがあるが、そのほとんどは未整理の段階である。1～8はS E 02から出土した土器で14世紀後半のまとまった資料となり得るものである。9はS X 05 から出土した土師器羽釜で、銜部が低い位置につけられ、16世紀末～17世紀にその時期を求めることができる。10はAトレンチの包含層から出土した近世の塩壺。11はS X 07の埋土上層から出土した16世紀中国景德鎮系の白磁皿である。12・13はS X 07埋甕1に使用された備前窯系の甕。14～16は埋甕3に、17は埋甕2に使用された常滑窯系の甕と考えられる。（篠原豊一）



S E 02・S X 05・包含層出土土器 1/4



S X07出土陶器圖 1 / 8

8. 平城京左京五条二坊二坪の調査

1. 経緯

本調査は、奈良の大安寺考古学資料館遺跡の2・3、河原宮5号・12号遺跡において、建築資料博物館に伴なう事前発掘調査として実施した。当該地は、平城京の東坊では左京五条二坊二坪に相当する。調査地、敷地の中央に東西約、長さ29m（44坪）の東西発掘区を、敷地北端に一等土の坪地小路の遺蹟を目的として、東西2m、長さ3m（10坪）の東西2・3発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和47年12月20日から昭和48年1月17日までである。



発掘区の設定 1/700

2. 発掘遺構

遺構上層の説明をした後、各遺構の概要を記述する。発掘区内の土層は次のようなものであった。褐色の耕作土以下、灰色砂質土、黄色粘質土と褐色粘質土のA層で黄白色砂質土に通ずる。その下層には約30cmの厚さで灰色砂質土、黄白色砂質土が堆積する。遺構はこのうち黄白色砂質土上層で発出した。発出した遺構は壁2条、建物2棟である。壁S Aは発掘区中央で発出した東西壁。その部分を発出した。柱間は西から2.1m-2.1m-2.4m-2.4m-2.4m-2.2mである。西から数えて第1柱穴と第3柱穴に柱礎が残存していた。遺構の東端部から後述する建物S B以上の新しいことがわかる。壁S Aは発掘区中央で発出した東西壁。2段分を発出した。柱間は2.0m-2.0mである。建物S Bは約10mの長方形でであろうか。建物S Bは発掘区東端で発出した東西壁。西端柱間のみを発出した。柱間は2.4m-2.4mとなろう。建物S Dは発掘区東北端で1柱穴のみを発出した。発掘区西へのびるため全体の遺構は不明であるが、建物S



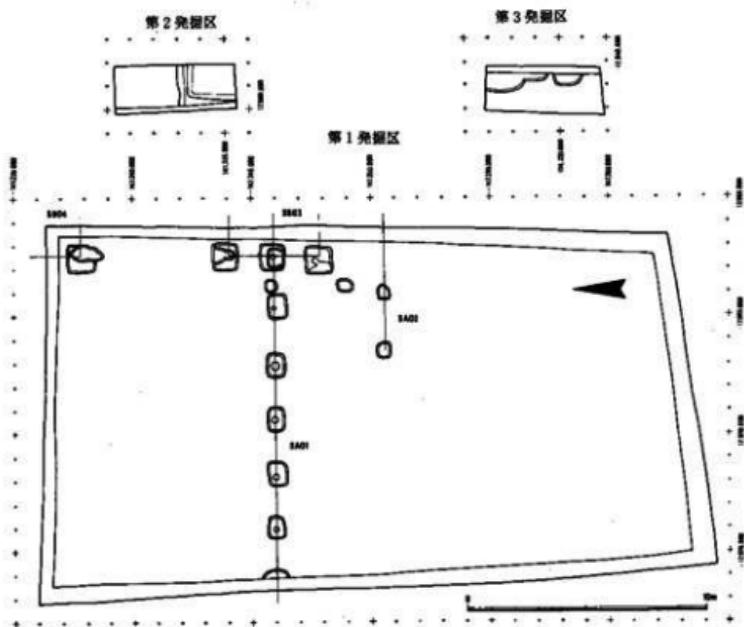
- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 耕作土 (表土) | 2. 黄白色砂質土 |
| 3. 灰色砂質土 (表土) | 4. 黄白色砂質土 |
| 5. 黄色粘質土 | 6. 褐色粘質土 |
| 7. 灰色砂 | |



第1発掘区西端地層土層図 1/50

B03と妻柱筋をそろえる東西棟となる可能性がある。S B03, S B04のいずれにも柱抜取痕跡がある。これらの遺構はいずれも奈良時代のものであるが、中でも大きく2期に区分できる。第1期に属するものにはS A02, S B03, S B04があり、これらが廃絶した後第2期のS A01が設けられたものであろう。第2・3発掘区では奈良時代の遺構は検出できなかった。付近の遺存地割などからみても、一坪との坪境小路は今回の調査地より北側に位置するものと考えられる。また、全発掘区を通じて遺物はほとんど出土しなかった。最後に、塀S A01が二坪の中で占める位置を検討してまとめにかえる。塀S A01は国土方眼位を介して朱雀門心から南へ1251.510mの位置にある。ところが平城京の条坊は朱雀大路で国土方眼位に対して $N 0^{\circ} 15' 45'' W$ の振れをもつことが知られているので、これをとり修正を加えると両者間の距離は1254.052mとなる。ここで塀S A01が二坪の北辺から $\frac{1}{4}$ に位置すると仮定した場合の朱雀門心から塀S A01までの計画尺(80尺(二条大路 $\frac{1}{4}$ 幅)+3600尺(二坊幅)+450尺(一坪幅)+112.5尺($\frac{1}{4}$ 坪幅))=4242.5尺で修正距離を除すると0.2954mとなる。この数値は平城京の造営単位尺としてはほぼ妥当なものだと判断され、これによって塀S A01が二坪を4等分割する施設の一つであると考えられよう。

(西崎 卓哉)



検出遺構平面図 1/250

9. 平城京左京五条三坊十三坪の調査

1. はじめに

本調査は、奈良市大字寺町(旧藤原の)において、藤原朝倉庫建設に伴う事前地質調査として実施した。当該地は平城京の条坊では五条五条三坊十三坪に相当する。調査対象地の北側を旧奈良西郷が、西側を中道入安寺第4号線が通行しているため、不整形な敷地内(23坪)を設定せざるを得なかった。調査は昭和39年1月19日に開始し、同年2月16日の現地での日誌を終了した。



敷地内の位置 1/200

2. 地質調査

敷地内の土質地層状況は次のようなものであった。地表の耕作土以下、耕土である灰土が厚く、その下に間次増強し地表下約50cmで地山である黄白色砂質土に達する。透水性はわずれもこの地山と面で見出した。掘出した透水性は掘り後、硬物(石、瓦)後、土層(土)などがある。以下



地質調査断面図 1/200

遺構の概要を記述する。塀S A01は、発掘区中央で検出した東西方向の塀。3間分を検出した。柱間は2.4m—2.4m—2.4mである。建物S B02、S B03は発掘区南東隅で検出した掘立柱建物。いずれも発掘区外へのびるため全体の規模は不明。柱間は、S B02が東西方向2.4m、南北方向1.8m、S B03が東西方向2.7m、南北方向2.1mである。柱穴の重複関係がなく时期的な前後関係は不明。建物S B04は発掘区北端で検出した掘立柱建物。1間分のみを検出した。柱間は2.1m。溝S D05は発掘区北半で検出した東西方向の素掘り溝。幅1.3m前後、深さ0.4mを測る。埋土から土器、瓦が出土した。溝S D06はS D05に接続して掘られた素掘り溝。S D05との接続部から南へ3.7mのところまで西へほぼ直角に屈曲する。溝底面の高低差からみて、水流はS D06からS D05へ向かっていたものであろう。溝S D07は発掘区中央で検出した東西方向の素掘り溝。重複関係からS D06より古いことがわかる。先述したS D06は、このS D07を拡張、S D05に接続したものであろう。土壌S K09は発掘区西南隅で検出したもの。東西1.4m、南北1.0m、深さ0.2mを測る。埋土から土師器、瓦が出土した。S K10は発掘区中央で検出した土壌。東西約5.6m、南北約2.5m、深さ約0.3mの長方形土壌が連続する。埋土から土器、瓦が出土した。

Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、遺構中及び遺構面を覆う遺物包含層から瓦、土師器、須恵器が出土した。いずれも奈良時代のものであるが、ここでは軒瓦について報告する。1は複弁7弁蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+8の大ぶりの蓮子を置き、外区内縁には左回りの唐草文を、外区外縁には線鋸歯文を配する。平城宮6348型式と同形である。S K09出土。2は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。細い圏線で囲まれる中房には1+8の蓮子を置く。二重の圏線で画された外区は無文である。平城宮6227型式に属するものである。S K10出土。3は均整唐草文軒平瓦。瓦当面对し右端のみが出土した。上方に開いたC字状の中心葉内に、平行する二条の縦線によって垂飾される花頭をもつ中心飾りから、左右に3回反転する唐草文を配するものとなろう。平城宮6663—F型式と同形である。

(西崎 卓哉)



出土軒瓦拓影

10. 平城京左京五条五坊五坪の調査

1. はじめに

本調査は、奈良小西中公園の遺跡地において実施した。奈良市の春日中学校の校舎増築工事に伴う事前調査である。調査地は、平城京の東部東部では左京五条五坊五坪の北辺中あたりにあたる。調査は、東西30m、南北12.5m(47坪)の発掘区を設定して行ない、調査期間は、昭和30年2月1日から3月3日までである。



発掘地の位置 1/750

2. 調査経過

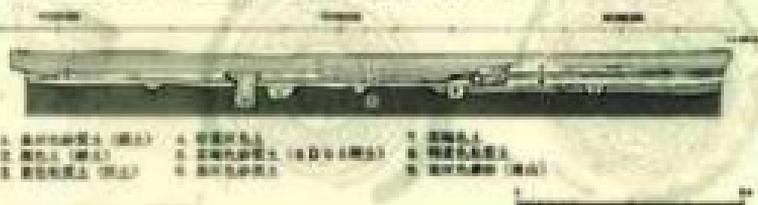
発掘地の埋積土層は、地表下約30cmまで柱状遺構等の実土で、以下順に、1) 黄土、2) 赤土、3) 赤褐色粘土と層積し、地山の褐色粘質土に達している。このうち赤褐色粘土からは、7世紀後半からの奈良時代にかけての土器片が出土した。主な出土遺物は、板瓦・瓦葺り土、瓦葺り土葺り土、瓦葺り土葺り土などである。

5A区(発掘地の南西隅)で出土した全長2間(3.9m)の板瓦葺。柱間は1.8m等間である。主軸が国土方方位に対して、西へ37°傾いている。

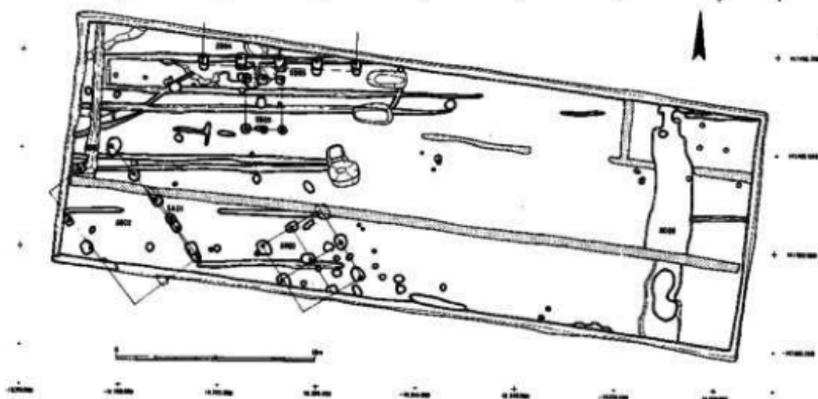
5B区(5A区と重複して発掘した南行4間(7.2m)、南行2間(3.9m)の板瓦葺。柱間は、南行が1.8m等間、北行が1.6m等間である。柱穴は不規則で、板瓦の埋土中からは7世紀後半の土器片が出土した。遺物の主軸が国土方方位に対して、西へ37°傾いている。柱穴の遺構間隔から、5A区よりも古いとされる。

5C区(5B区東側)で出土した東西2間(3.9m)、南北2間(3.9m)の板瓦葺。柱間は、東西1.8m等間、南北1.6m等間である。遺物の主軸が国土方方位に対して、西へ37°傾いている。

5A区、5B区・C区は、国土方方位に対する主軸の異なることから、同種類の遺構であると考えられる。その時期は平城京遷都以前の7世紀後半であろう。



西側地層土層図 1/100



検出遺構平面図 1/250

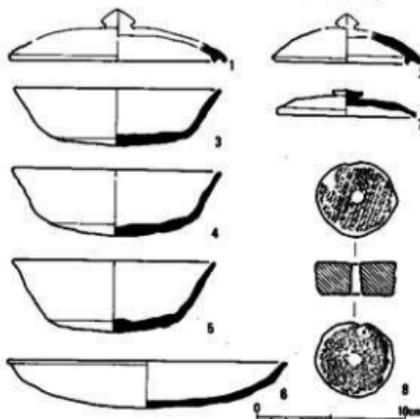
S B04 発掘区北壁近くで検出した全長4間(7.8m)の東西柱列で、東西棟の南側柱列と考えられる。柱間は1.95m等間。重複関係からS B05より新しいことがわかる。

S B05 S B04と同位置にある同規模の東西柱列で、これの前身建物であると思われる。

S B06 S B05南側にある桁行1間(3.6m)、梁行2間(1.8m)の南北棟。梁行は0.9m等間。

S D07 発掘区西端で検出した南北溝。幅0.4~0.5m、深さ25cm内外を測る。溝内には茶褐色砂質土が堆積し、奈良時代の土器片が若干出土した。南端で西へ折れ、発掘区外へのびる。

S D08 発掘区東端で検出した南北溝。幅1.5~2.3m、深さ20cm内外を測る。溝内には暗黄灰色の粘質土が堆積し、土師器片少量が出土。



出土遺物 1/4

Ⅲ 出土遺物

遺物は、包含層から出土したものが大半を占める。1・2・7は須恵器蓋。身受けの返りをもつもの(1・2)と、返りのない扁平なもの(7)とがある。前者は7世紀後半、後者は8世紀のもの。3~4は須恵器杯。わずかに丸味を帯びた底部と、上方外に開く口縁部とからなり、底部外面はへら切りそのまま放置されている。いずれも7世紀後半のもの。9は土師器皿。8は平瓦片を円形状に打欠き中央に小孔を穿ったもの。重さ69gを量る。用途は不明。(篠原 豊一)

11. 高領町内遺物散布地の調査

本調査は、奈良の高領町(旧高領郡)において実施した奈良市の長柄原(旧宇佐郡)に併う調査である。調査地は、御蔵山の南麓、御蔵川まで段状に形成された水田で、調査地点に含まれる赤土層北西段は、奈良時代～室町時代の遺物散布地である。発掘調査による調査を行った際、赤土層北段において、土師器、瓦器類、瓦葺等の遺物を発見したが、地内については耕作深度より掘り下げて地がつかれており、遺物は破壊されているものと判断された。そのため、地の境線および特異における遺物の有無を確認するため一この発掘区を設け試掘調査を行った。調査期間は昭和27年3月10日から21日までである。

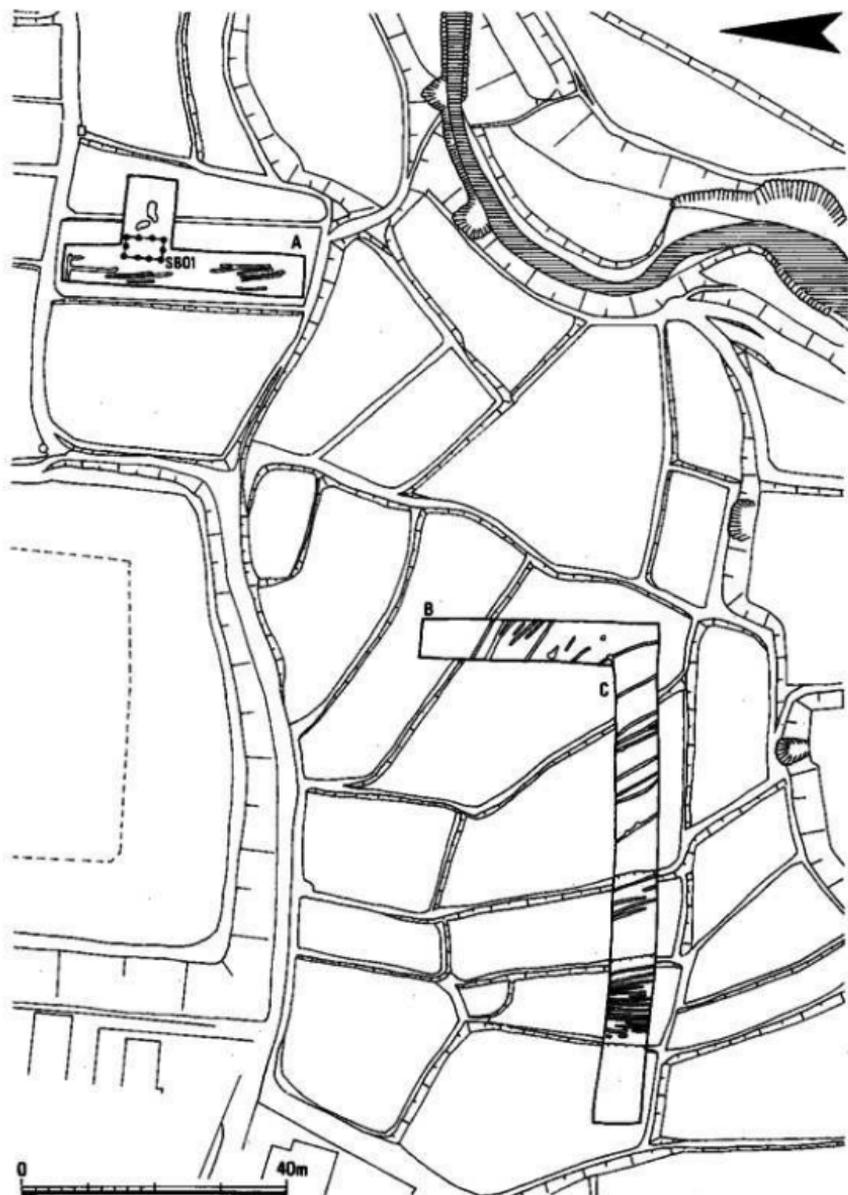


発掘区の設定 1/200

Aトレンチ 東西30m、南北30mの発掘区で、調査地区内では最も土層の高い水田に設定した。土層は、赤土の下、灰褐色粘土(15cm)の層があり、その下は高層砂礫層の御蔵山となる。地山面において、水田の耕作に伴うものと考えられる遺物や遺構と建物を見出した。建物3軒は、東行2間(12.0m)東行2間(12.0m)の南北棟である。柱間隔は約3.0mと小さい。柱礎については、柱礎内よりの赤土遺物がなく赤土層に、発掘区内においては、灰褐色粘土層内より若干の瓦器破片が出土している。地表面において発見した遺物にも奈良時代のものと思われるものが多く、奈良時代の可能性が考えられる。なお建物の基礎も検出するため調査区を狭く、幅7m、長さ10mの区を設定した。

Bトレンチ 赤土層北段の高層、Aトレンチも設定した水田より少し低い水田に設定した。発掘区は東西30m、南北30mである。発掘区の本格的な土層は、赤土、赤土の下、灰褐色粘土(20cm)の層で、その下は、灰褐色砂礫、灰褐色砂礫となる。灰褐色砂礫、灰褐色砂礫は、いずれも、調査地区内の小字「河原田」の名残がみられ、調査地区の南に流れる御蔵川によって形成された土層と考えられ、遺物はまったく含まない。遺物はこれらの土層上面において検出した水田耕作に伴うものと認められる地層に進行した遺物や遺構だけである。

Cトレンチ Bトレンチ南端より西へ南北30m、東西30mの発掘区を設定した。Bトレンチを設定した水田とCトレンチ西端の水田との比高差は2.5mである。土層はBトレンチと同様で、地山は、西方へ傾斜する。検出遺物は水田においてその地層に進行する遺物や遺構だけで、その遺内より、土師器破片、土師器破片が出土し、遺物の種類は一層は中世のものであることがわかる。また赤土の下、灰褐色粘土層よりは瓦器破片、土師器が出土した。 (編者 渡方)



検出遺構配置図 1/900

12. 平城京左京六条二坊十坪（東二坊坊間路）の調査

本調査は、奈良の大宮西門2丁目8番地において実施した、長柄会会中理直文化財調査センター建設工事に伴う事前調査である。調査地は従来まで奈良市衛生浄化センターの敷地として利用されたところの跡地で、新設建物の予定位置にはこの前の地下水涵み上げ施設と通風管が残存していた。そのため、地下遺構は窺えなくなっていることが当初から予想されたが、同位置には平城京の東分館跡で東二坊坊間路の東側溝が想定されたために、本調査地を選んで調査を行った。調査の期間は昭和57年は月20日から25日までである。調査にあたっては西側東西17m・南北30mのトレンチを想定したが、埋物の厚さや1.5mを超える深さなどの制約から、実際に掘削面を掘えたのは4mにすぎず、同じ遺構は検出できなかった。なお、埋物土層は地表下約2mまでが造成土上、以下は赤褐色粘土が1.5mの厚まで堆積し、暗褐色腐植土の堆積となっている。（中井 公）



発掘面の位置 1/200

13. 平城京右京五条西坊十三坪の調査

本調査は、奈良市五条西坊西1条の事務所で行ったマーケット調査に伴う事前調査である。調査地は西ノ京広域の一画であり、東からはいり込んだ瓦敷に位置する。発掘区は東西50m、南北70m（面積約3500㎡）である。調査は、昭和57年2月20日から25日まで行った。

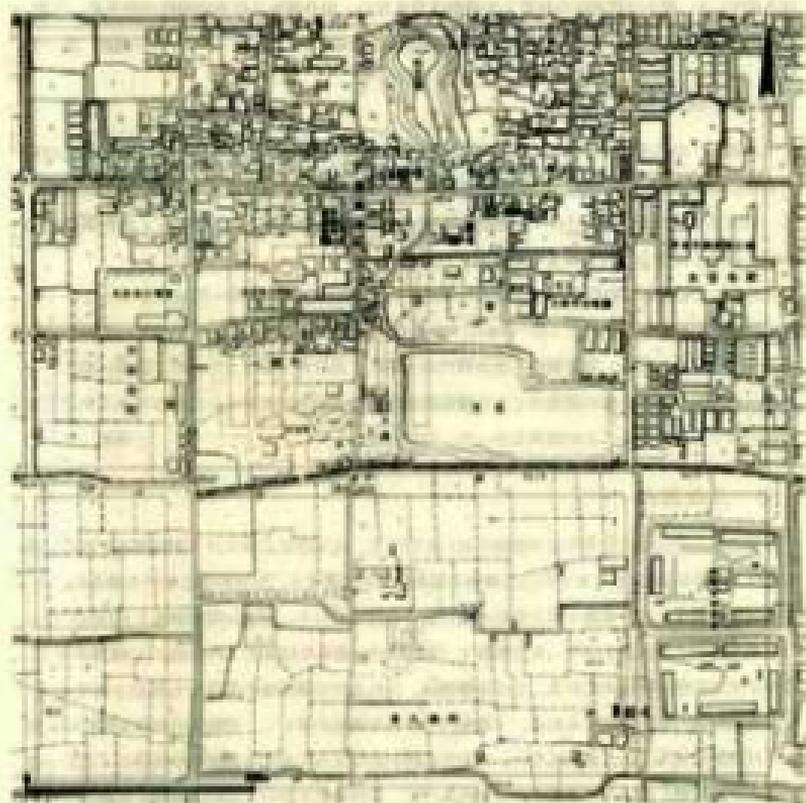
発掘口の幅は、地味から約1.2mは造成した際の黄土、以下、黄土、赤土、灰色腐植土とつづき、その下は、淡黄色砂礫層と赤褐色腐植土が1～1.5mの厚さで互層となり堆積している。さらに1.5m程度掘り下げたが、同じ埋物がつづき、掘削が苦しい。遺物の出土もなく、調査も遺構も検出できなかった。平城京左京については、三坊、四坊の部分は西ノ京の北東部であり、石段土は、宅地として利用されたことがこれまでの調査で確認されている。また右京は右京二条西坊での調査では自然地形を確認しただけで、遺構は検出されていない。今回の調査の結果もこうした平城京左京の形制を裏づけるものとなった。（森下 達介）



発掘面の位置 1/200

14. 史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内においては、昭和27年度にも併せて発掘調査を実施した。いずれの調査も私人住宅等の影響あるいは改修工事の申請に対応したものである。調査地点は下の位置図に示したが北西に少しは東部の西郷村まで2箇所（図-1・4・5の位置）、西郷村境内で2箇所（図-1・2の位置）、北郷村境内で1箇所（図-3の位置）である。このうち図-4の調査では、平行して東西方向に約60メートルの切石敷瓦葺の遺存がつかもとめられ、北郷村境内に懸る遺構の可能性が考えられた。以下、各調査の内容について順次記すことにする。（中略）（公）



発掘図の位置 1/500

82-1 次調査

本調査は、奈良市大安寺町東護麻堂1161番地の4において実施した、住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は、大安寺旧境内護院推定地の中央やや西寄りにあたる。調査は東西2.8m、南北6.8m(発掘面積19㎡)の発掘区を設定して行ない、調査期間は昭和57年6月7日から6月12日までである。

発掘区の土層堆積状況は、地表面から近現代の盛土である黄灰色土、黒色土が約40cmにわたっており、以下、旧耕土の黒灰色土(約30cm)、包含層の淡褐色砂礫土(約30cm)が堆積し地山の淡茶灰色砂土に至る。調査の結果、発掘区の南東隅で一辺0.6m、深さ0.1mの平面形状の土壇を検出した。埋土は明黄灰色粘質土で遺物は含まない。包含層からは奈良時代の軒平瓦、瓦片、土師器片が出土したが、顕著な遺構は何ら検出できなかった。(篠原 豊一)

82-2 次調査

本調査は、奈良市大安寺町ヒラキ1161番地の1において実施した、住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は、大安寺旧境内護院推定地の中央やや西寄り、82-1次調査地の東隣に位置する。調査は東西6.0m、南北3.0m(発掘面積18㎡)の発掘区を設定して行ない、調査期間は昭和57年10月1日から10月6日までである。

発掘区の土層堆積状況は地表面から近現代の盛土である黒灰色砂土が50~70cmにわたっており、以下順に、旧耕土の黒色粘土(20~30cm)、包含層の淡青灰色粘質土(10~20cm)が堆積し、地山の淡黄色粘土に至る。包含層から奈良時代の土器片、瓦片が少量出土したが、遺構は検出できなかった。81-1・2次の調査とともに護院推定地のほぼ中央部で行なったものであるが、調査範囲も狭く成果を得ることが出来なかった。今後に期待したい。(篠原 豊一)

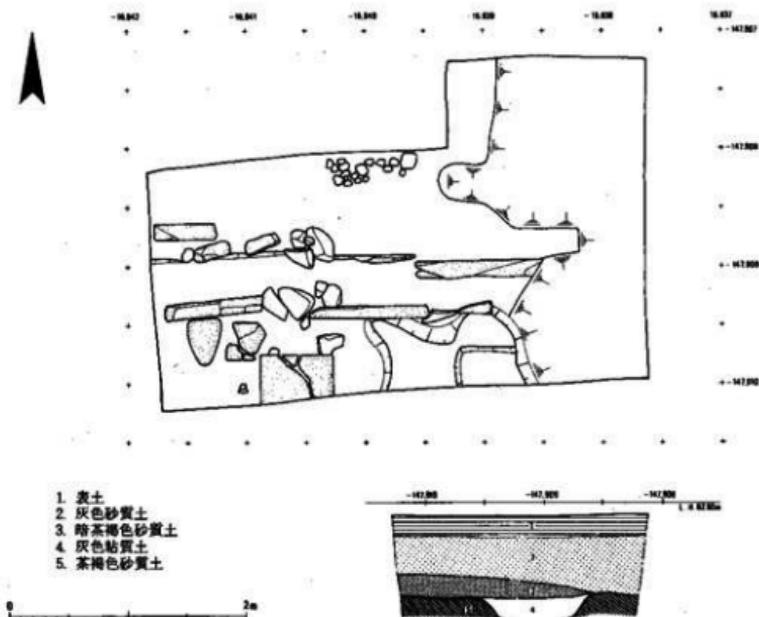
82-3 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1125番地において行った、住宅増築工事に伴う事前調査である。調査地は、大安寺寺域に含まれる杉山古墳前方部の西南に位置する。民家中庭における調査のため発掘区は、南北4m、東西1mと制約を受けざるを得なかった。調査は昭和58年2月14日に行った。発掘区の土層は表土の下、灰色砂質土(約10cm)、黄灰色粘質土(約8cm)の堆積があり、その下には灰色砂礫層が広がる。この砂礫層は、これまでの隣接地の調査でも確認されており杉山古墳周濠の埋土と考えられる。一部掘り下げたが湧水が著しく、発掘区の面積の制約から掘り下げを断念した。出土遺物はない。大安寺北面中房の北方にあたる調査地の周辺は『大安寺縁起并流記資材帳』に「一坊池并岳」とあるように、奈良時代においては杉山古墳の周濠が残されていたものと思われる。(森下 恵介)

82-4 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1147番地において行なわれた奈良市立大安寺小学校の土壁撤去とフェンス設置工事の立会の際に、基壇化粧と考えられる凝灰岩切石が発見されたために急ぎ実施した調査である。調査地は、大安寺小学校校庭東北隅で、北面中房が講堂北面より北へのびる軒廊につながるあたりに相当する。調査区は、フェンスの基礎部分をやや拡張した東西4m、南北2mの範囲で、昭和58年2月15日、16日の2日間を費やした。

調査の結果、東西方向に掘付けられた凝灰岩切石列2条を検出した。切石列は原位置を保たないものもあり、北側のものが北面、南側のものが南面に面を取り、約50cmの間隔で断続的に並行する。また石列の間には焼土、瓦類を多く含んだ灰色粘質土が堆積し、石列の外側には基壇築成土かと考えられる茶褐色砂質土層がみられる。これらの点から、今回検出した石列は基壇内に設けられた石組み溝の一部である可能性が考えられる。しかしながら溝とするには石列のいずれも外側に面を取ることなど、不自然な点も多い。切石は比較的残存のよいもので幅15cm、長さ1m、高さ40cmで、これを基壇化粧と考えるならば、時期の異った基壇の重複ともみられる。これ以上



82-4 次調査検出遺構平面図・西壁堆積土層図 1/50



82-4次調査出土軒平瓦拓影

の調査は、立会調査といった性格のために行わないこととし、石列の性格については、今後計画される大安寺の保存整備時の調査に期すことにした。

調査で出土した遺物は丸瓦、平瓦が大半であるが2点の軒平瓦が出土した。1は、平城宮6717-A型式、2は平城宮6712-B型式であり、いずれも大安寺において比較的多く用いられた軒平瓦である。時期については、やや退化した均整唐草文から8世紀後半と考えられている。(森下 恵介)

82-5次調査

本調査は、奈良市東九条町1412番地において、住宅建築の申請に対して実施した事前調査である。調査地は、平城京条坊の左京七条四坊十坪の東辺にあたり、大安寺の花園院に想定されているところで、昭和52年にはこれのすぐ東隣で奈良県教育委員会が十・十五坪間の小路確認を目的とした調査を行なっている。調査の期間は昭和58年3月8日から10日までの3日間で、東西5m・南北9m(45㎡)の範囲を発掘した。調査地はそれまで畑地として利用されていたが、床上げがなされて周囲よりも一段高く、耕作土・床土の下には約50cmの厚さで茶褐色砂が入れている。これの下に厚さ30cmほどの青灰色粘質土の包含層があり、瓦や須恵器の細片をわずかに含んでいる。これより下が灰色粘土の地山となるが、床上げ前の農業水路の痕跡がみられたほかには遺構は何ら検出することができなかった。(中井 公)

82-6次調査

本調査は、奈良市大安寺町ヒラキ1265番地の4において、農業倉庫建築の申請に対して実施した事前調査である。調査地は大安寺伽藍の復原では、東中房北列(東面僧房)の東外側にあたり主要な建物はないとされるところである。調査前は畑地として利用されていたが、床上げされて周囲より一段高くなっている。調査の期間は昭和58年3月16日から23日までで、東西5m・南北8m(40㎡)の範囲を発掘した。発掘区内の堆積土層は、耕作土・床土の下、黄褐色砂質土、暗灰色粘質土、灰褐色砂質土と続き、地表から約80cmで灰色礫の地山となる。検出された遺構は、発掘区の西辺近くで西側に広がりをもつと思われる土塊状の窪みがみとめられただけで、他には何ら顕著な遺構をみいだせなかった。この窪みには暗灰色の粘土が堆積しており、中からは奈良時代から中世にかけての瓦の小片若干が出土した。(中井 公)

圖 版



1. 東部区全景（東から）



2. 西部区全景（西から）



1. Aトレンチ全景（西から）



2. Aトレンチ東端部（西から）



3. Bトレンナ全層（西から）



4. Bトレンナ全層（東から）



5. Cトレンチ全景（西から）



6. Cトレンチ全景（東から）



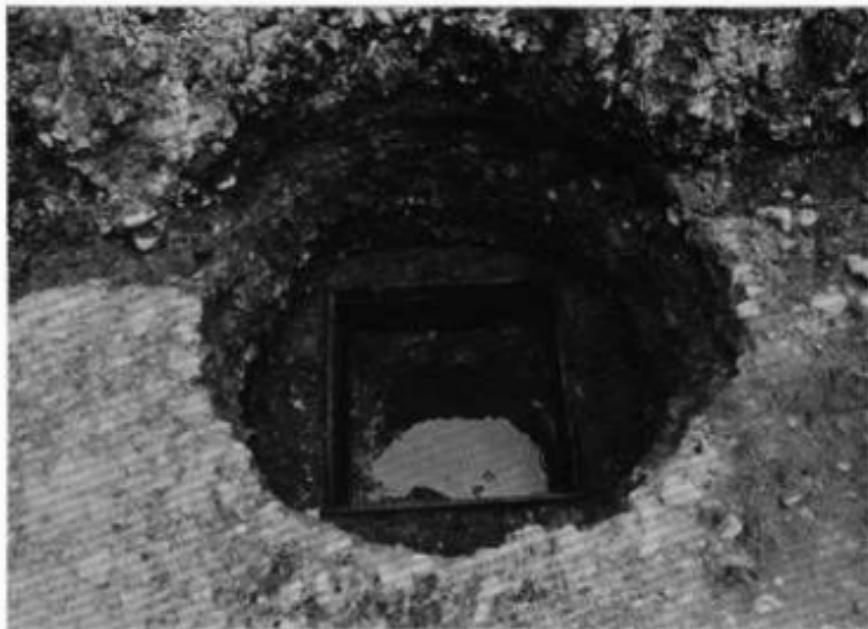
7. Dトレンチ全景（東から）



8. Dトレンチ全景（西から）



1. 発掘区全景 (南から)



2. SE01全景 (西から)



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. Aトレンチ全貌 (西から)



2. Bトレンチ全貌 (東から)



3. Cトレンチ上層全景 (西から)



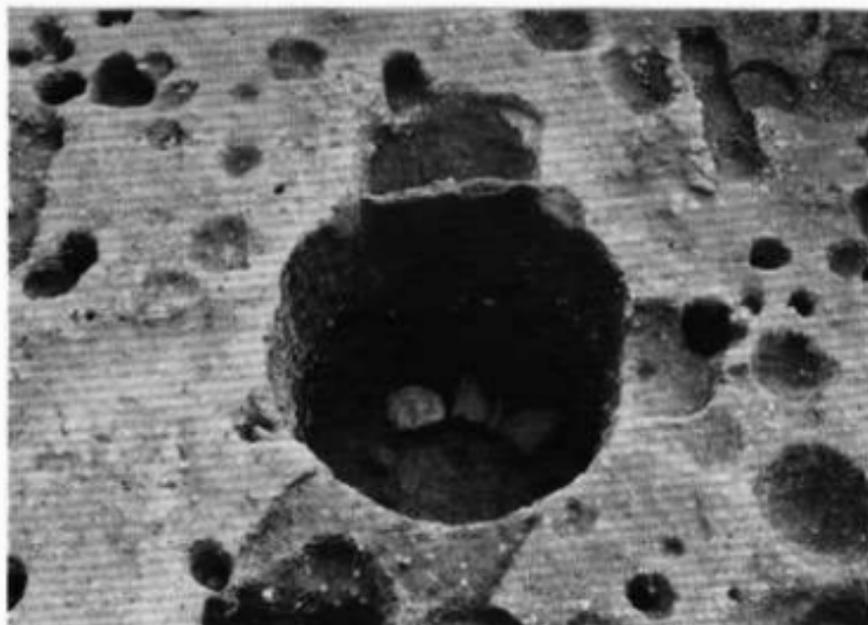
4. Cトレンチ上層全景 (北から)



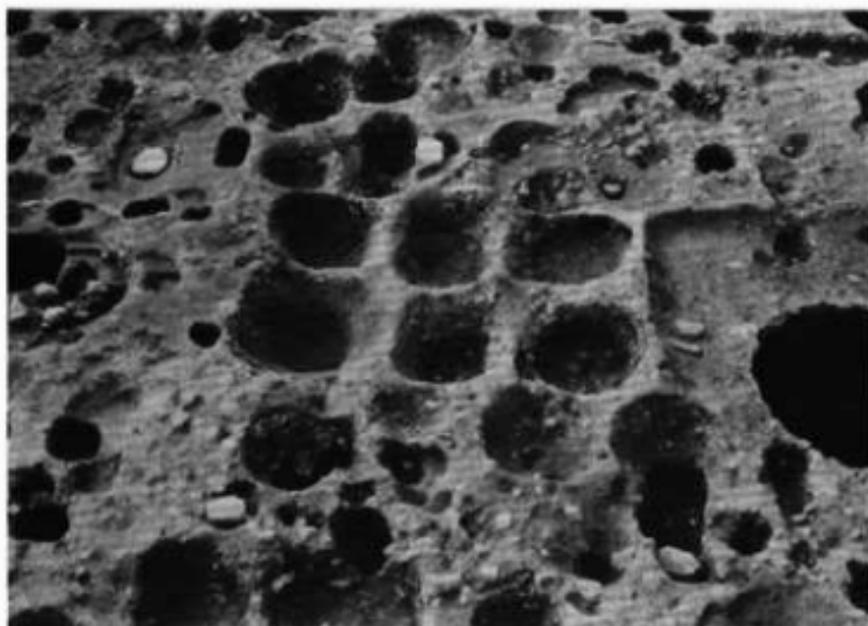
5. Cトレンチ下層全景(西から)



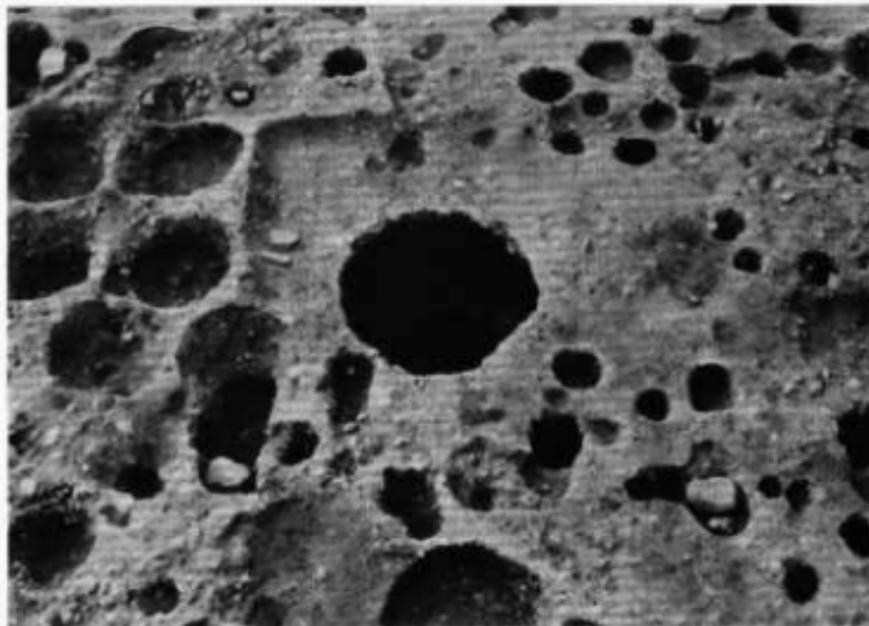
6. Cトレンチ下層全景(東から)



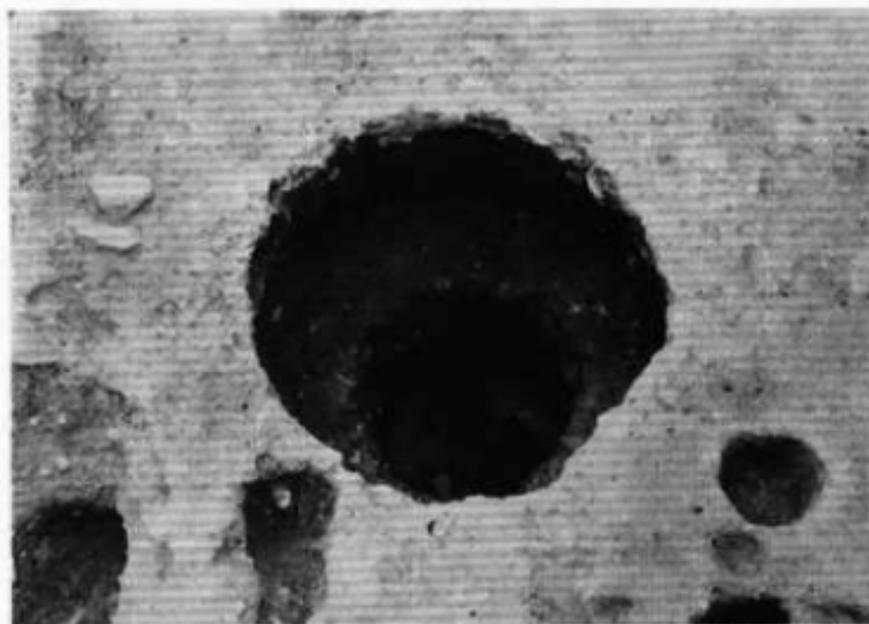
7. SE03 全景 (北から)



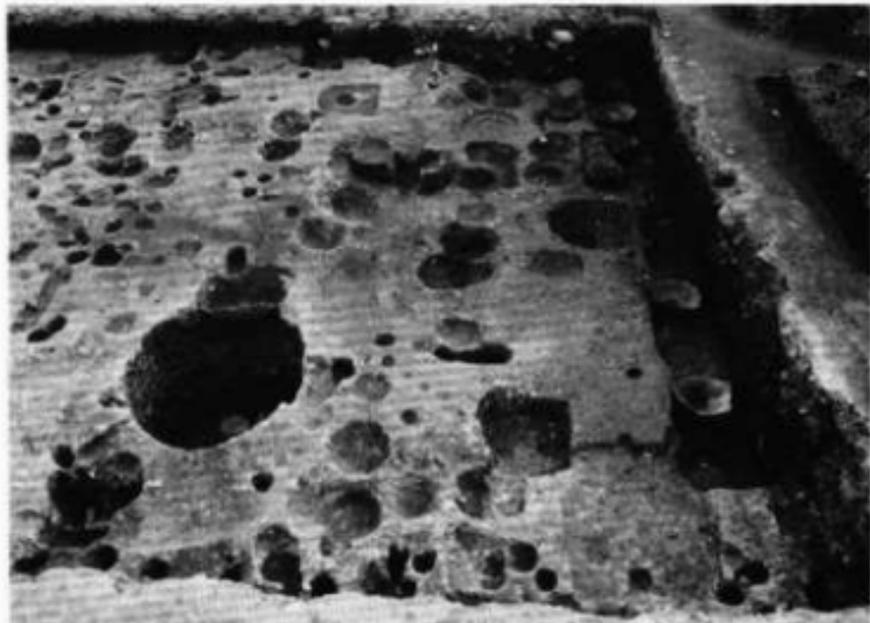
8. SX06 全景 (東から)



9. SX05 全景 (西から)



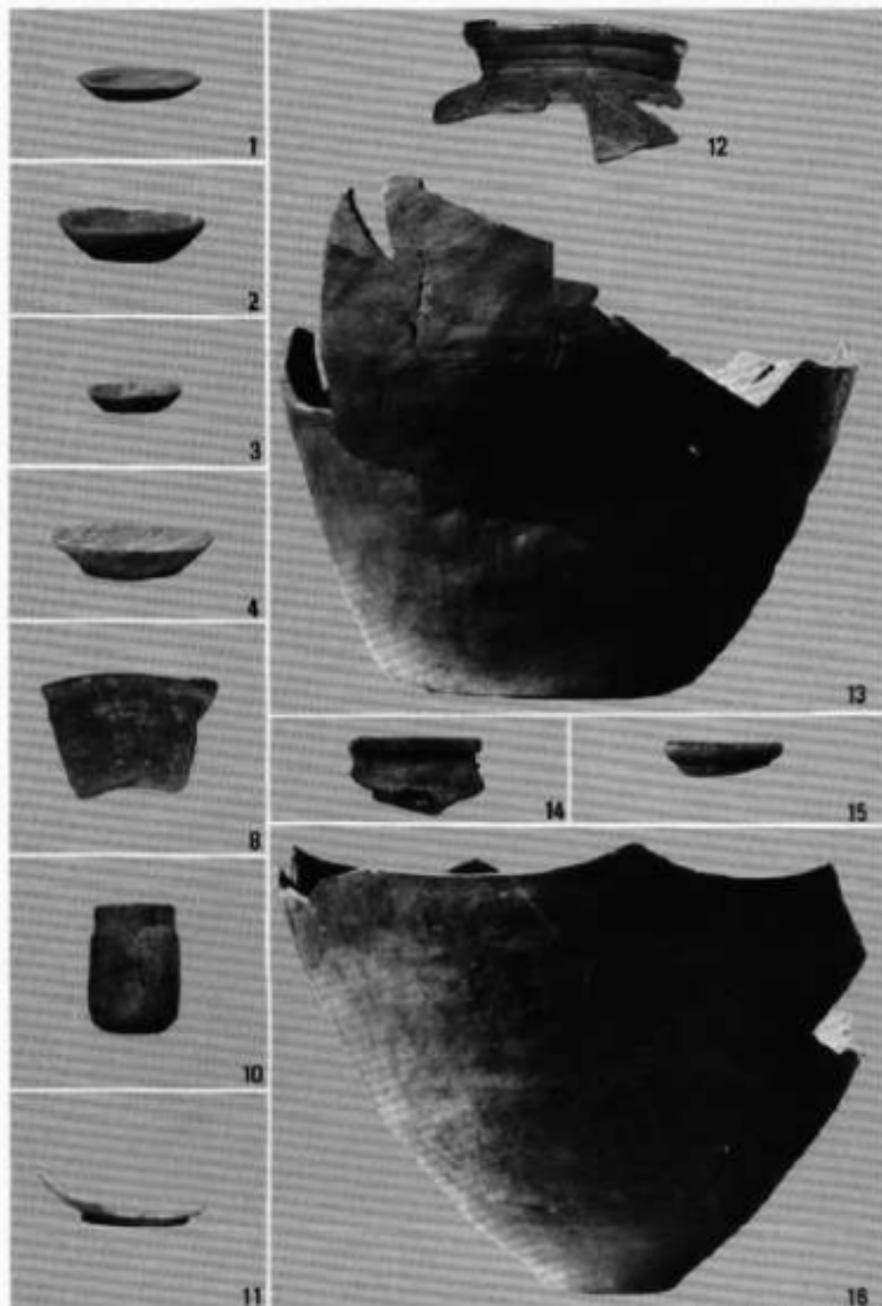
10. SX05 部分 (西から)



11. SX07 全景 (北から)



12. 大甕 1・2 (南から)





1. 発掘区全景(南から)



2. 発掘区全景(北から)



3. 跡SA01 (西5-6)



4. 跡SA02 (西5-6)



5. 建物SB03 (西から)



6. 建物SB04 (西南から)



7. 第2発掘区全景(南から)



8. 第3発掘区全景(南から)



1. 東側区全貌 (東から)



2. 東側区全貌 (東から)



3. 建物SB02・SB03(西から)



4. 建物SB04(北から)



5. 溝 SD06 (西南から)



6. SD05・SD06 渡杭部 (北から)



1. 奥掘区全景(西から)



2. 奥掘区全景(東から)



3. 奥堀区(北から)



4. SA01・SB02(東から)



5. SB03 (北中-6)



6. SB04・05・06 (南中-6)



1. Aトレンチ全景 (南から)



2. Aトレンチ全景 (北から)



3. Aトレンチ状況 (東から)



4. SB01 (西から)



5. Bトレンチ全景 (北から)



6. Bトレンチ全景 (南から)



7. Cトレンチ全景(西から)



8. Cトレンチ全景(東から)



1. 発掘区全景(東から)



2. 発掘区全景(西から)



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 奥掘区全景 (北から)



2. 奥掘区全景 (南から)



1. 檢出遺構全景（西から）



2. 檢出遺構全景（北から）



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和 57 年度

昭和 58 年 3 月 25 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

編集発行 奈良市教育委員会
(奈良市二条大路南1丁目1-1)

印刷 共同精版印刷株式会社
(奈良市三条大路2丁目2-6)

